

薬量が散布出来るよう、また均一に散布するよう良く訓練することが必要です。

(7) 除草剤の物理化学性

除草剤は、その水溶解度や化合物の形で効果の特性が現われますから、薬剤の性質をよく理解できるよう知識を深めておくことが肝要です。

最近、特に薬害の発生の多くなったことを耳にしますが、他所の実験データーを鵜呑みにすることは危険であります。近頃のように新薬が、たくさん出廻り、また将来も開発されるであろう数多くの薬剤に対し、不断の実験、研究を重ね、自分のところに適したものをみつけ出すことが肝要であります。薬剤散布時のちょっとした、天候、気象、或いは、芝の目に見えない生理状態等で重大な誤りの原因となることもあります。要は、芝生の状態を見て、適期に適量を均一に散布することが雑草防除の根本です。

いたずらに無計画に乱用することは不経済で

あるばかりでなく、栽培目的物までもおかすことになります。誤ったやり方、いかげんなやりかたは芝生にも敵であり、鳥鳴き花咲く丘を忘れてはなりません。

3. 公害防止

最近公害に対する問題は社会問題として大きく取り上げられ、各方面で公害に対する諸問題は真剣に取り上げられている。われわれ芝生を維持管理するものにおいても、各種の殺菌剤、殺虫剤、除草剤を使用しているが、このなかには、公害に通ずるものも多数あると思われるので、取り扱いには充分注意しなければならない。したがって、現在使用されているもの、或いは今後開発されるであろう各種新薬剤に対する、人畜または植物自体に及ぼす影響については、充分に注意を喚起する必要がある、関係方面の早急な研究と対策、解決を望むものである。

昭和45年度林地関係除草剤

試験成績概要

農林省林業試験場造林部除草剤研究室長 真 部 辰 夫

検討会は昭和46年2月8日、日本植物調節剤研究会協会会議室で行なわれた。供試除草剤および検討結果は1表のとおりである。

1. MO-500の除草効果は、非常に良好であった。薬害については、愛媛林試のヒノキまきつけ床において、生育初期に頂芽に僅かな徴候がみられたが、枯死するものはなく生育が進むと回復した。これによって重大な生育障害はうけなかったものの、一応再検討することで継続になった。この徴候は赤沼では発生してなく、

44年の試験でもみられなかった。赤沼は火山灰土壌、愛媛は沖積層土壌であるため、土壌中の吸着ないし移動の相違によることも考えられる。

2. DC-55は、まきつけ床では非常に良好な成績をおさめ、薬害もなく問題はなかった。ところがえ床では、効果のないハナタダが発生したため（本数はきわめて少ないがはびこるため、被度、重量は増加する）除草効果は若干低下し

< 1 表 >

昭和 4 5 年度林業関係除草剤試験成績判定表

対 象	薬 剤 名	作 業	判 定	試 験 場 所	備 考
ス ギ ア カ マ ツ	M O - 5 0 0	まきつけ とこがえ	実	林試赤沼試験地	実用散布量は 20~30cc/a
ヒ ノ キ	同 上	とこがえ	実	同 上	
ヒ ノ キ	同 上	まきつけ	継	同 上	
スギ, ヒノキ ア カ マ ツ	D C - 5 5	まきつけ とこがえ	継	同 上	
ス ギ	M O - 5 0 0	まきつけ とこがえ	実	愛媛林試南与分場	
ヒ ノ キ	同 上	とこがえ	実	同 上	
ヒ ノ キ	同 上	まきつけ	継	同 上	

た。内容を検討すると、優占植生であるメヒシバに限った場合は良好な成績を示し、イネ科雑草優占苗畑では充分使用できるものと思われる。しかし、1 回限りの試験であるため、あと1~2 か所の試験を行なった上で判定することになり、継続となった。

最近林業苗畑に対するいろいろ新しい除草剤の進出の動きがみられるが、この機会をかり若干現状にふれておきたい。

苗畑は林地と異なり農業と作業が似かよっていることと、集約化されているため、除草剤の導入には好都合で、現在の普及率は90% (推測) 近くになっているものと思われる。面積を

みると、民有林約6,800 ha, 国有林約4,500 ha, で計11,300 ha 程度である。この面積は年次による変動はきわめて少ない。うち60~65%程度が育苗地になるものと思われる。

対象樹種は何といてもスギが最も多く、次いでヒノキである。生産実績は2表のとおりである。

通常年2~3回の散布で、現在の使用除草剤はNIP, CATがほとんどで、まきつけ床はNIP, とこがえ床はCAT, NIPが使用され、とくにとこがえ床ではCAT, NIPを庭先混合して使用しているところもある。

雑草は何といてもメヒシバ優占地がもっとも多い。

< 2 表 > 経営形態別、樹種別、山行苗木生産量の推移

年 度	総 数	国 営						民 営					
		総 数	ス ギ	ヒノキ	マツ類	カラマツ	その他	総 数	ス ギ	ヒノキ	マツ類	カラマツ	その他
昭 和 4 0	(百万本) 1,573	270	94	26	46	27	77	1,303	547	294	253	129	80
4 1	1,543	273	94	29	43	26	81	1,270	511	299	247	119	94
4 2	1,452	257	89	25	33	24	86	1,195	472	291	229	113	89
4 3	1,340	244	86	27	28	24	79	1,096	425	275	211	103	82

※ 林業統計要覧による(1970)

以上のような現状からみて今後の新しい除草剤を考えてみると、次のようなことを念頭におく必要があると思っている。

① 面積的にいって苗畑用のみの開発よりも、農業でかなり使用されているものの導入が望ましい。

② N I P, C A Tのように優秀な除草剤が使用されており、普及率も高いことを考えると、この除草剤に匹敵ないしそれ以上のものか、特徴あるもの、たとえば、メヒシバに卓効がある、効果に持続性があるもの、価額が非常に安い、殺菌剤との混合剤など何か特徴がないとはいいうる余地はきわめて少ない。

③ 将来植木用苗畑、庭園のほか道路敷、公共用地に需要がみこめる可能性があるが、この方面の利用を併わせて考えるべきであろう。

④ メヒシバに卓効のある除草剤が最も望まれる。

使用者の立場からすれば、同一除草剤を長年使用するよりも、適宜植生、作業に応じていろいろの除草剤が選べることが望ましい。しかし、限られた需要で多くを望むことも無理であろうが、上記のように利用分野拡大という意味で、優秀な除草剤が安価に導入されることを期待したい。

農 林 統 計 編

昭和46年2月15日、農林省統計調査部より公表された「昭和45年産茶生産量調査結果」によると、

- ① 茶栽培農家数は、1,026,000戸で、前年に比べ4%減少した。
- ② 茶栽培面積は、(昭和45年8月1日現在)51,600haで、前年に比べ3.8%(1900ha)増加した。これは、主要生産県において専用茶園の造成が行なわれたことによる。
- ③ 茶の摘採実面積は44,100haで、前年に比べ0.5%とわずかに増加した。摘採延べ面積は110,500haで、前年に比べ0.7%増加した。これを茶期別にみると、冬春秋番茶は14.4%、2番茶は2.7%増加し、1番茶はほぼ前年並であった。これに対し、3,4番茶は翌年の1番茶にそなえて摘採を中止した茶園もあり、前年に比べともに減少した。また、10a当たり生葉収量は859kgで、前年に比べ14%の増収となった。
- ④ 昭和45年産の生葉収量は378,900tで、前年に比べ1.9%(7,140t)増加した。これを茶期別にみると、一番茶は年間収量の約50%を占め、主産県の静岡では発芽の不揃いや浅刈りなどにより減少したが、その他の都府県では、摘採面積の増加と晩霜害がなかったことなどにより増加したため、総体的には前年並となった。2番茶は生育良好で、摘採面積も増加して前年に比べ7.8%、4番茶は摘採面積が減少したにもかかわらず、10a当たり収量の増加により29%、冬春秋番茶は1.7%とそれぞれ増加した。一方、3番茶は摘採面積の減少などにより、前年に比べ4.7%減少した。